

小論文

受験番号				フリガナ	
				氏名	

I. 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子は開いてはいけません。
2. 試験開始後、頁の落丁・乱丁および印刷不鮮明、また記入用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 試験終了後、記入用紙を回収します。
4. この問題冊子は持ち帰ることができます。ただし、試験終了後、監督者の指示があるまでかばんの中等にしまうことはできません。
5. 監督者の指示に従い、問題冊子及び記入用紙の「受験番号」・「氏名」欄に正しく記入してください。

II. 下記の文章を読み解答してください。

1. 試験時間 : 60分
2. 課題 : 日本語の課題1題
3. 解答の仕方 : 記入用紙に記入してください。

令和2年度 一般入学試験「小論文」

下記の文章を読んで、このお母さんにとってより苦しみに満ちた物語を作り出すことによどのような意味があつたのかを考え、筆者の言う「人間が作り出す物語の尊さ」(文中の下線部)とはどういうことかを400～600字で説明しなさい。

私がここで思い出すのは、一九八五年、日航ジャンボ機の墜落事故で、九歳の息子さんを亡くされたお母さんの姿です。私は遺族の方々が編まれた文集を読んだのですが、この九歳の坊やは生まれて初めての一人旅で、大阪のおじさんの家へ行く途中でした。当時人気のあった、清原、桑田のいる PL 学園を応援するために、甲子園で野球観戦をする予定でした。それであの、JAL123 便に乗ったのです。

たぶんお母さんは、スチュワーデスさんがいる分、新幹線より飛行機の方が安心だと思われたのでしょう。羽田まで息子さんを見送ったその別れ際、息子さんは「ママ一人で帰れる？」と言ったそうです。

なぜあの飛行機に乗せたのか。九年の人生で一番怖い思いをしたらう時に、どうしてそばにいてやれなかったのか。お母さんの文章は、始終自分を責める言葉で埋まっています。直接そうは書かれていませんが、自分が子供を殺してしまった、という思いが伝わってきました。

恐らく同じ立場に立たされた母親なら、全員そう思うでしょう。一生自分を責め続け、自分を許さないでしょう。しかし、現実をありのままに見るなら、責任を取るべき人たちは他にいます。尾翼の不良を見逃した日航か、機体を製造したボーイング社か、同じ機体が以前しりもち事故を起こした時、調査した運輸省(当時)か……、とにかく責められるべき人がいるはずで、そして母親には何の落ち度もありません。

けれど、たとえそうした責任追及がきちんとなされ、原因がはっきり解明されたとしても、母親の罪悪感は消えないはずで、自分が子供を殺した、というフィクションの中に、苦しみの源を持ってくる。そういう苦しみをしなければ受け止めることのできない悲しみが、この世にはあるのでしょう。

事故からちょうど二十年が経った夏、テレビのニュースでそのお母さんの姿を拝見する機会がありました。遺族の集まりのリーダー的存在として、さまざまな活動を通し、空の安全を追求している様子が映し出されていました。もちろん、息子さんを失った悲しみは一かけらも消えていません。しかし、悲しみに押しつぶされるのではなく、それを礎として、自分の経験を社会のために生かそうと努力しておられる。そのお姿に胸を打たれました。

現実を棘で覆い、より苦しみに満ちた物語に変え、その棘で流した血の中から、新たな生き方を見出す。お会いしたこともないお母さんから、私は人間が作り出す物語の尊さについて教えられた気がしました。

(小川洋子『物語の役割』ちくまプリマー新書、2007年。表記を一部改変している。)

